

(10) 国会都市はどうあるべきか

想定課題

那須地域に整備される国会都市は、どのような都市であるべきか。

■ 対応方向

国会都市は、新たな日本の顔であり、国際政治都市である必要があります。

国会等移転審議会では、新しい都市像のコンセプトとして、「国民や世界に開かれた政治・行政」、「にぎわいと文化の香り」、「やさしさに満ちたコミュニティ」、「自然環境との共生」を提案しています。

一方で、どのような都市ができるのかは、移転先の住民にとって、地域の将来展望や個々の生活に密接に関わる大きな課題でもあります。

そこで、国会等を受け入れる側としても、その地域の特性や実状に合った望ましい新都市像を積極的に提案していくことが必要であると考えます。

ただし、審議会では想定されているような56万人規模の都市が短期間にできるわけではなく、国会等の移転に関する法律第9条にもあるように、社会経済情勢の変化に弾力的に対応することが出来るよう段階的に整備が進むものと思われます。

しかも、地方分権や行政改革の進展、東京都との連携が容易であること、「栃木・福島地域」としてより広い地域が候補地として選定されたこと、「栃木・福島地域」を支援・補完する役割を担う「茨城地域」をはじめ北東地域各県との連携等を考慮すると、那須地域への移転人口自体、審議会が想定しているよりも相当程度少なくなることが考えられます。たとえば、北東地域5県が策定した「北東地域首都機能移転モデル都市構想」では、移転人口は30万人程度と想定しています。

したがって、那須地域の特徴を最大限に生かした新都市像を描くにあたっては、こうしたことを十分踏まえる必要があると考えます。

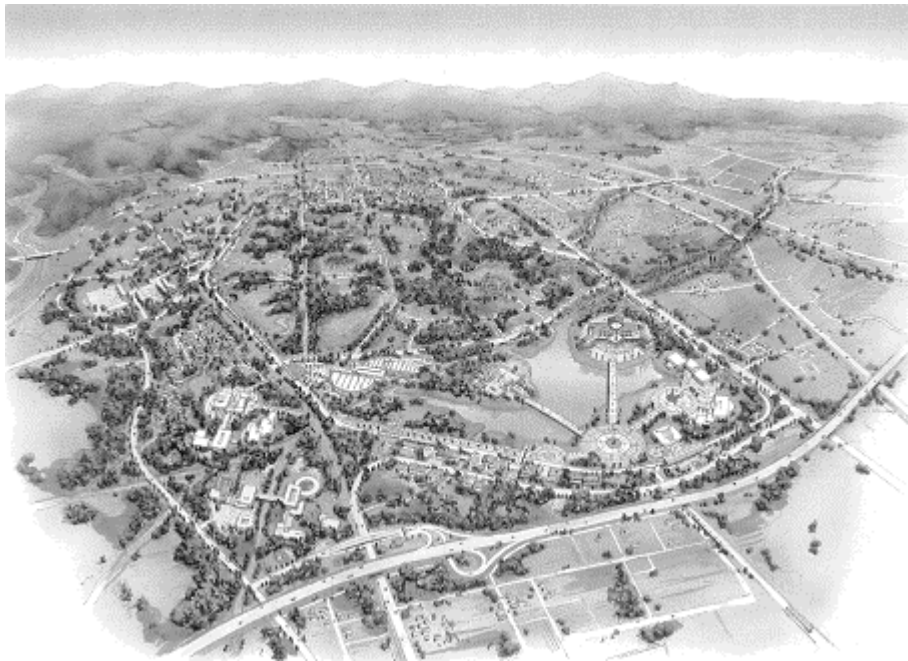
なお、国会都市は、那須地域に展開する新都市群を代表する都市であると同時に、21世紀の日本を代表する都市となるわけですから、その都市づくりにあたっては、特に、次のような理念をもつ必要があると考えます。

「自然にとけ込む環境共生都市、世界に情報発信する国際政治・交流都市」

1 「環境」：自然にとけ込み環境に負荷を与えない

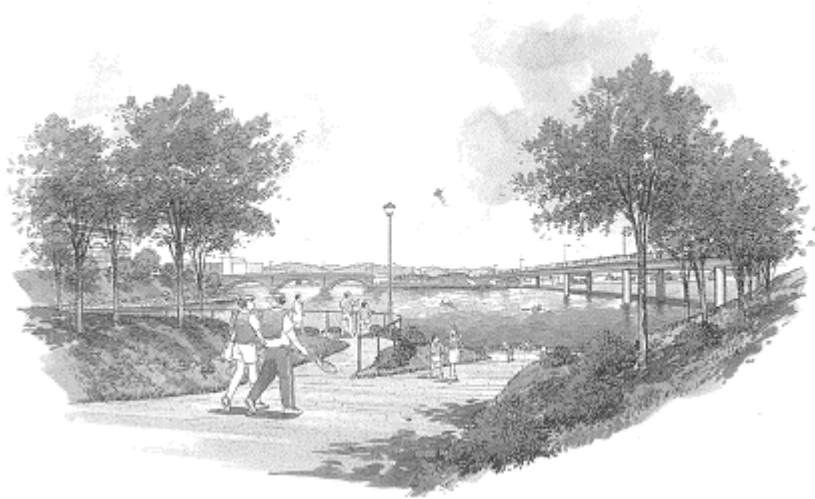
- ・ 自然環境、地球環境を大切に都市をつくる
- ・ 自然に対峙、自然を征服するのではなく、山、大地、緑、水、地形を尊重し生かして、都市をとけ込ませる
- ・ 自然と身近に触れ合える、環境と共生するライフスタイルを実現する
- ・ 自然の機能を生かし環境を守る
- ・ 車に依存しない交通体系に基づくコンパクトシティを創る
- ・ 先端の環境共生技術を取り入れた実験都市とする

- 2 「文化」：わが国固有の都市づくり理念を現す
 - ・ みどりや水辺などの自然・地形の骨格を規範に据えて、まちづくりの手がかりとする
 - ・ 柔らかな都市の実現を考慮する（可変容易性・木の文化の具現化）
 - ・ 20世紀の西洋型都市と異なるわが国独自の都市づくり手法を新世紀に甦らせる
 - ・ 日本の文化の独自性・アイデンティティを新都市に体現する
- 3 「平和」：世界に情報発信する
 - ・ わが国の文化・アイデンティティを世界に発信する
 - ・ 新しい都市づくり手法の提案・波及を通じて世界に貢献する
 - ・ 20世紀型都市文明の閉塞を打破するヒントを世界に示す
 - ・ 国際社会の中で地位を高める国際的な政治・交流都市とする



国政都市区のイメージ図

[資料]「北東地域首都機能移転モデル都市構想」



大水面・広場を囲む首都機能地区のイメージ図



緑豊かな行政府の街並みのイメージ図

[資料] 「北東地域首都機能移転モデル都市構想」